

令和元年度 第1回 青梅市総合教育会議のテーマ 一覧

委員	手塚幸子
テーマ	教育を青梅の魅力の一つにするために
概要	<p>商店が店をたたみ、子ども達の数が減り、若い教員が集まらない、暗い話が漂う青梅。「自然が魅力」だけではどうにもならないなら、今現在良い面をもっと伸ばすことで全体が上がっていくという、ある意味教育的ともいえる手法から以下の2点を考えました。</p> <p>1. 音楽 「吹奏楽やりたい子は青梅へ」を合言葉に、市内中学校吹奏楽部の活動をもっと支援し、市の自慢としてPRをもっと注目される存在に。</p> <p>2. 特別支援教育 長い間、先進市としてやってきた青梅市に、世の中の流れが追い付いてきた今、これからの方向性をしっかり考え、次のステップに進み、誰もがその子に合った教育を受けられる真のインクルーシブを青梅の自慢にし、あえて「点教」以外のところで勝負しては。</p>

委員	稲葉恭子
テーマ	訪問型家庭教育支援チームの体制を作る
概要	<p>保護者が子育ての不安や悩みを持ちながら、地域で孤立してしまうと、子育ての課題を保護者が抱え込んでしまうこととなります。児童虐待のような深刻な問題につながるリスクも高くなります。しかし、一般的には、悩みや課題を抱えた保護者は、家庭生活に余裕がないことも多いため、自ら保護者向けの学びの場や相談の場などに足を運ぶことは難しいと考えられます。</p> <p>訪問型家庭教育支援は、地域の子供は地域社会全体で育てるという考え方に立ち、地域の人材を活用した家庭教育支援チームが家庭に支援を届け、保護者への支援を通じて子供の育ちを支えていくことを目的としています。</p> <p>具体的には、家庭の孤立化を防ぎ、家庭教育に関わる問題の発生予防や早期発見につなげるとともに、チーム員が保護者の話を聴くことによる家庭教育に関する悩みや不安の解消や、保護者が学びの場などの拠点につながることを支援したり、不登校を含む専門的な対応が必要な問題に対しては専門機関の支援につなげることで、訪問型家庭教育支援の重要な役割です。チーム員が専門的な知識を持って保護者を教え導くよりも、保護者と同じ目線に立って寄り添うことに意義があります。</p>

委員	大野容義
テーマ	不登校児童生徒の自分探しを支援するために
概要	<p>市内の不登校児童生徒の出現率は依然として高い。学校においては教室に入れない児童生徒のための第2の教室、市全体としては子ども家庭支援センターや主任児童委員、教育相談室と学校との連携や、訪問指導などの適応指導教室の事業の拡大などを十分に検討し、少しでも不登校気味の児童生徒の学習の権利と健全な育成を図る必要がある。</p> <p>総合教育会議では、成果を上げている新町中学校長や第三中学校長、学校に寄り添い懸命に取り組んでいる子供家庭支援センター、教育相談に尽力している教育相談室、学校への適応指導に取り組んでいる適応指導教室の担当者などを招いて話を聞き、施策の充実のために市長と教育委員とで課題意識を共有することから始めたい。</p>

委員	榎本淳一郎
テーマ	①学校のプール指導の今後 ②多様化していく人種に対応した学校のあり方
概要	<p>①今後プール活動をどうするかは、必ず議題にあげなければならず、費用も時間も大きく関わる問題であるため、先送りできない。委員会設置も含めて検討していく必要がある。</p> <p>②人口減少と少子高齢化は簡単に解消できないため、今後海外からの日本への人が入ってくるとい流れはとめられない。また、他人種の人たちと関わっていくことは今後国際社会で生きていくスキルを身につけさせてくれる経験であり有用であると思う。そういう環境を整えていく足がかりの議論をしておく必要がある。そこには教師の語学力、講習など、日本語教育が必要な生徒の割合の把握など現状をリサーチしておき準備が必要である。</p>